都会で

——或は千九百十六年の東京——

芥川龍之介

一

風に靡(なび)いたマッチの炎(ほのほ)ほど無気味(ぶきみ)にも美しい青いろはない。

二

如何(いか)に都会を愛するか？——過去の多い女を愛するやうに。

三

雪の降つた公園の枯芝（かれしば）は何よりも砂糖漬にそつくりである。

四

僕に中世紀を思ひ出させるのは厳（いか）めしい赤煉瓦（あかれんぐわ）の監獄である。若し看守（かんしゆ）さへゐなければ、馬に乗つたジアン・ダアクの飛び出すのに遇（あ）つても驚かないかも知れない。

五

或女給の言葉。――いやだわ。今夜はナ、イ、ホ、ク、なんですもの。

註。ナ、イ、ホ、ク、はナイフだのフオオクだのを洗ふ番に当ることである。

六

並み木に多いのは篠懸（すずかけ）である。橡（とち）も三角楓（たうかへで）も極めて少ない。しかし勿論派出所の巡査はこの木の古典的趣

味を知らずにゐる。

七

令嬢に近い芸者が一人(ひとり)、僕の五六歩前に立ち止まると、いきなり挙手の礼をした。僕はちよつと狼狽(らうばい)した。が、後(うし)ろを振り返つたら、同じ年頃の芸者が一人、やはりちやんと挙手の礼をしてゐた。

八

最も僕を憂鬱にするもの。――カアキイ色に塗つた煙突（えんとつ）。電車の通らない線路の錆（さ）び。屋上（をくじやう）庭園に飼（か）はれてゐる猿。……

九

僕は午前一時頃或町裏を通りかかつた。すると泥だらけの土工（どこう）が二人（ふたり）、瓦斯（ガス）か何かの工事をしてゐた。狭い路は泥の山だつた。のみならずその又泥の山の上にはカンテラの火が一つ靡（なび）いてゐた。僕はこのカンテラの為にそこを通ることも困難だつた。すると若い土工

が一人(ひとり)、穴の中から半身を露(あらは)したまま、カンテラを側(わき)へのけてくれた。僕は小声に「ありがたう」と言つた。が、何か僕自身を憐(あはれ)みたい気もちもない訣(わけ)ではなかつた。

十

夜半(やはん)の隅田川(すみだがは)は何度見ても、詩人S・Mの言葉を越えることは出来ない。――「羊羹(やうかん)のやうに流れてゐる。」

十一

「××さん、遊びませう」と云う子供の声、――あれは音の高低を示せば、××San［＃「San」は３０度位右上がり］Asobi-ma show［＃「show」は３０度位右上がり］である。あの音はいつまで残つてゐるかしら。

十二

火事はどこか祭礼に似てゐる。

十三

東京の冬は何よりも漬(つ)け菜(な)の茎の色に現(あらは)れてゐる。殊に場末(ばすゑ)の町々では。

十四

何かものを考へるのに善(よ)いのはカツフエの一番隅の卓子(テエブル)、それから孤独を感じるのに善(よ)いのは人通りの多い往来(わうらい)のまん中、最後に静かさを味ふのに善いのは開幕中の劇場の廊下(らうか)、……

（昭和二年二月）

底本：「芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
１９７１（昭和46）年10月５日初版第５刷発行
入力校正：j.utiyama
１９９９年２月15日公開
２００３年10月７日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。